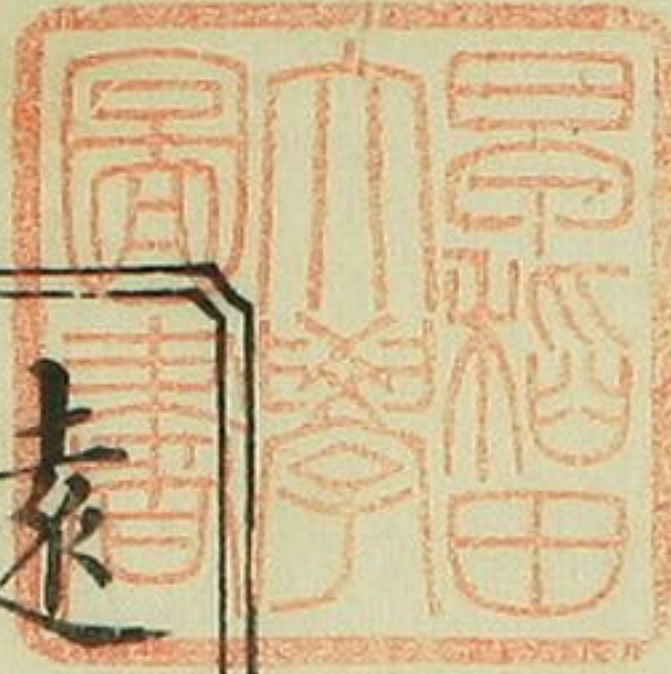


遠近新聞
第七號



定價一匁

西垣文庫
文庫10
7265
5



特 文庫10
7265
5

遠近新聞第七号

慶應四年閏四月廿五日

去る九日頃白昼侍体の者二人白山の或る町家小
押入りて金子を強談つと及び及び白山辺へ町人ども
兼々兼々非常ひじょうの為ため竹槍等たけやりらの用意ありけを須波すな大變おほ
ありとと忽たちち四十人に裡手うち手て竹槍を携かへ寄集より
件の盗賊どくろ向むかひけるに盗賊と其勢そのいき辟易へきえきして逃廻にげま
りし小駒込辺ここまがへの一筋道ひとすぢみち追詰おひめられ前後まへより廻まら
は進退しんたい小究こきゆうり垣かきを飛越とびこへ或る屋鋪やぐら小入りて隠かくを
むとせしと白昼ひるの事ことあるを其屋鋪そのやぐらの人々ひとら直ただ小駈か出で

遠近新聞

第七号

卅二

西垣文庫

5766

て之を捕へんとせしかを盜賊も復行く處を失ひ遂
小垣を越へて元の場処に出つるや否や先の町人共
竹槍を以て直し之を突留めしと云ふ

○横濱新聞紙の抄訳

當今日本の形勢都て外國の交易小關係少ありらば
故小先月來の事件の大略を看官に報告す
今日事實の最信用せしき者の報告を得ると固より
難く又當今日本小かゝる力を争ふ二黨西諸侯の目
的を知らん事益々難しと云ふ
去る正月中 將軍の兵士圖らばも敗北し薩摩の兵

之を攻撃しせしより東諸侯の兵氣挫けて一時戦ふ
勢ありしと云ふの勢に至り

將軍大坂より没落の後未だ東諸侯の勢故に復た
る小至らば此時當つる 將軍を誹謗する者甚多
是も物の表向を見て其心衷を視ざる者ありて
將軍の没落せしと卑怯するもの如しとりへども實に
深謀遠慮あるを知らざるあり君 將軍大坂城に
扱つる自ら備ふる時西諸侯のよめ小之より都合
よらるる乃ち大坂城に 將軍のよめ系蹄の如く
ゆいて圍を支へると數日わいて其地を取れ共

其身を失ふんと必然あり且其間小 將軍の北國
 の味方之を救ふんとて無益に兵力を費して敵
 兵のさめ敗北せんとは亦顯然あり
 弱兵を以て京師に進發せしめしを過ちありされ共
 是も重き會津の願ひよりてのとあれを 將軍の
 過も非き其進發の後猶大坂に止らるを過ち過ち
 を重ぬるよと遂に救ふ處ありざるの危難に至らん
 故に 將軍江都に退軍し 皇帝は恭順を盡し又
 會津をして忘動せざらしむ但し其恭順の実ありや
 偽りあるや我輩の得て知るべからざる所ありと虫

東方の散乱せる軍勢を再聚するの時間を得しと全
 く恭順のさめあり又勝利を得る上方勢は西國に
 徳川氏に荷擔する者ありと頻に盡力せり
 西國の諸代に諸候を 徳川太祖家康公の外諸
 候の關係としてありとありと此等の事あり
 上方勢の進軍延引せしめしあり殊に神戸并に境に於て
 外国人と事件起りて殆ど新政府と外国人との和親
 を破るべき勢に至り是又進軍延引の根原となり
 り且 勅諭書の文言分明ありざる所あり夫を吟味
 して伺ふよかぬ又一時延引あり是皆東諸候の為

め甚より而して遂に三月中旬に 將軍の水戸城に
 至り其地を退隱し江戸の城を 勅使大原前侍従に
 渡りしより爰に於て東方を益々忿怒し堪へず益奮發
 して會津を隣国の諸候と合し即ち説て曰西諸候の
 策に己等の地を廣むると我々を奴隸にせんとあり
 此時 將軍の猶も暴動を禁ししより爰に於て有志の
 者を脱走して江戸外に集り江戸城の番兵館を追
 出し再び之を徳川家族の爲に取戻さんとせざるの勢
 あり
 會津を元の如く 皇帝は恭順忠実を尽せ然を共

會津は勅諭書至りしを是實物あり然らざれば我
 を惡む族の 皇帝より無理に請取りしあらん且
 罪の虚実の 皇帝の裁判所に出て之を明さんと
 言へり爰に臣下の忠実ある者を薩長は惡を報せん
 とて浪人の身とあり徳川氏の領地を離るる者共は
 歩兵の脱走せざる者と合して江戸近在に於て官軍
 をして安眠せざるしめんとは爰にわが官軍差向
 けらるるとりへども脱走方を地理に委しきと以て
 官軍敗北せりと多し之を憂ひ官軍方を海陸兩道
 より援兵を催し脱走兵に抵抗して江戸城を守らん

ともし若し會津の官軍を向けし時を再び長久征伐の
起るが如くありんされ共薩長を會津兵の共同類の
對し怨を會むとり人共遂に一統の大利のよめ私
怨を捨て小を捨て大を取るの義事をあはべし
我等此事に附て言ふ所は官軍の兵を向けし者
を皆赦し徳川氏の内東の領分を返し將軍を京師
の政に預らしめん事ありされども我等の言ふ所の
主意は外国人の上より付ての論あるゆゑ和睦をあは
方の如何格もてもよし只外国のミニストル機會を
得るに随つて和睦をせん事を新政府に説進めん事

是我願ふ所あり

一時北国を潰し其領地を分ち取らんとして西諸侯のよ
めよ必しも能をざるよ非をされども是は只夢の如
くふし其覺るる後を困難極めて多かるべし

弥堅居士譯

○ 武田耕雲齋の悴金次郎とちや人歳十五六才同人才
の由名前不知十二文の者越前福井へ此預けし相成
居し処今般水戸殿へ引渡し相成ゆ由ニ而上下百
四五十人程附添ひ金次郎の馬に乗る才の駕に乗る

鉄砲ニ前後を固め去ル廿五日頃夕方小石川金杉
水道町の宿屋へ着四五日逗留ニ勿水府へ出立可
相成尊有之由真偽未詳

○ 壬四月十八日朝五ツ半時頃雜司ヶ谷御嶽南坂と云
処よて侍体の者兩人抜合せ頻りゝ戦ひ一ツ終り年
倍の者眉間を切らさ切りぬ者をもうくと刀を拭ひ
護国寺の方へ逃去しよ

○大坂より来状し写

此度古金類直増尤も通

慶長金百枚付	代金九百五両一分二朱
享保金百両付	代金九百三十両一分二朱
古二朱金百両付	代二百六両三朱
保字金百両付	代三百九十六両二分一朱
安政二分判百両付	代百六十一両三朱
新大判一枚付	代二十六両二分二朱

右之通古金類直増お成す小柄子ゝ京都をり承り
申小間ふ取敢申上ル

當時十二文錢 二十四文 文久八文錢 十六文

銅六文錢 十二文

右に通法堂ハ

壬四月十五日

○

去る廿一日東山道惣督岩倉侍從館林より江戸侍歸
着因州屋敷へ法入の由

過日西郷吉之助横濱へ歸着と言ひ言ひわき壺説きにて弥十
九日三條■并二林玖十郎と共二大坂出帆の由右
実説いふれむ近日着船二ふるべー

